

海外アカデミック・ディスカッション	
英国におけるナショナルカリキュラムと文化	
青木 敬子	比較社会文化学専攻
期間	2009年10月7日～2009年10月21日
場所	イギリス
研修交流プログラム	過去と現在の歴史・理論について（ワークショップ）
施設	ロンドン大学教育大学院

現在イギリスの国語教育ではカリキュラム制定以来、必修としてシェイクスピア教育がおこなわれている。国語としての英語はカリキュラムにおいて重視され、知識テスト、マーク式テストが中等教育段階で実施されている。中等教育必修科目においては、シェイクスピア作品を、現在3作品規定しているが、主として言語や知識が中心となって教育されている。ナショナルカリキュラム以前、イギリスでは国語教育のみならず、ほかの科目においても、教員や地方教育委員会の裁量に任されていたものが、この20年で国家政策の対象となり、中央によってコントロールされている。この点は日本の教育システムと共通している。

今回のワークショップではロンドン大学教育大学院のディヴィッド・クルック博士と、ゲーリー・マカロック博士から歴史資料の有効性、継続性についての講演があった。その後過去の資料を使用して、どのように現在の理論に発展させるかについて、参加者とともに議論した。またクルック博士は海外調査以来助言をいただいている経緯もあり、英国滞在中に個人面接時間をいただいた。博士との対話では、国語・文学教育の歴史は文化との関わりが重要であることや、文化とカリキュラムとの関係もまた論点になることが導き出された。このことから、カリキュラムと文化という大きな枠組みが発見となった。これまで自分自身の研究の中では、シェイクスピア教育とナショナルカリキュラム導入までの文学教育史を主として論じてきたが、今後、このカリキュラムと文化を新たなテーマとして取り組み、章をかえて博士論文にて執筆したいと考える。

英国中等教育における文学は、主に国語力を高めることを目的に、知識問題の教材として使用されている。文学知識は国語科目テストとして中等教育修了資格試験において測られ、国民の国語力標準化をめざしている。しかしながら文学教育のよさは、異

なる時代の作品にふれ、その時代の言語、歴史、文化にふれることでもある。現代言語の標準化のため、知識問題の利用だけで文学教育がなされるべきではないとの指摘もある（注1）。カリキュラム上に文化が存在するという考えは、この点についても議論が展開できると考える。シェイクスピア教育を中心に、文学作品教育の意義を博士論文の中で見出したいと考える。

あらたな視点で一国のカリキュラムを考えると、そこには文化が存在する（注2）。この点は、すでにロンドン教育大学院の著名な研究者の間では、ナショナルカリキュラム制定前の70年代に論じられている（注3）。また文学史において文化の変化は非常に顕著な特徴がみられる。ハイカルチャー（古典作品）と、ローカルチャー（現代小説）である。英国ナショナルカリキュラムにおいても、文学教育の教材として選ばれる作家が、明らかにハイカルチャーからローカルチャーへ移行している現実を認識した。文学教育の必要性を考えると、カリキュラムにおける文化は教育と文学の接点となる。教育と文学は分野の異なる研究であるが、介在する文化によって接合性があると考ええる。またシェイクスピア作品はハイカルチャー作品の代表でもあり、今後シェイクスピア教育について研究することは非常に意義があると考ええる。

今回のアカデミック・ディスカッションは、前回の海外調査テーマ、イギリスの国語教育におけるカリキュラムという枠組みから、文化的側面を視野にいたれたカリキュラムへと発展させた。これは日本における国語、日本文学教育の中でも比較研究できると考える。また英国の伝統文学教育は日本の文学教育への関わりが大きいことから、今後もシェイクスピア作品教育を通して、具体的なカリキュラム内容とその制定にいたった政治的経緯を引き続き追求する所存である。この英文学教育の諸問題を、日英教

育学会にて発表したいと考えている。

Hodder and Stoughton, London. 1995.

2. Aldrich, Richard. *Education for the Nation*. Cassell, London. 1996.

3. Lawton, Denis. *Class, Culture and the Curriculum*. Routledge & Kegan Paul PLC, London. 1975.

注

1. Cox, Brian. *Cox on the Battle for the English Curriculum*.

あおき けいこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

青木敬子さんの本年度の海外アカデミック・ディスカッションは、昨年度おこなった海外「調査研究」の成果を土台にして、それをさらに「研究対話」として発展させたものであり、一方向的な研究から双方向的な研究へと進化・深化させたという点で特筆に値する。さらに内容的にも、(1)文学と教育を繋ぐ因子として（その社会で共有されている）文化風土に着目し、加えて(2)ハイカルチャーとローカルチャーの地殻変動が、文学を素材に国語教育をおこなうさいに与える影響関係を俎上にのせるという重要な視点を得たことは、貴重な成果であった。本研究で得た着眼点が今後さらに追求され、博士論文のなかで有機的に論じられることを期待している。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 竹村 和子)